

平成30年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－4号)

農林総合研究センター
平成30年6月18日調査

気象経過

< 平年対比 >

【平均気温】

- ・ 6月第2半旬は、金沢、輪島ともにかなり高い（平年差：金沢+1.2℃、輪島+1.8℃）
- ・ 6月第3半旬は、金沢、輪島ともにかなり低い（平年差：金沢-2.2℃、輪島-2.0℃）

【日照時間】

- ・ 6月第2半旬は、金沢、輪島ともに少ない（平年比：金沢 80%、輪島 90%）
- ・ 6月第3半旬は、金沢、輪島ともにかなり少ない（平年比：金沢 63%、輪島 35%）

【降水量】

- ・ 6月第2半旬は、金沢は少なく、輪島はかなり少ない（平年比：金沢 61%、輪島 0%）
- ・ 6月第3半旬は、金沢は並、輪島はかなり多い（平年比：金沢 77%、輪島 208%）

【1ヶ月予報】

6月14日発表の1か月予報（6月16日～7月15日）では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並みまたは高い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、平年並みまたは高い確率ともに40%です。2週目は、平年並みまたは高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並みまたは高い確率ともに40%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 草丈は、コシヒカリは平年比84～103%（県平均：95%、加賀：95%、能登：95%）と、加賀地域は平年よりやや短く、前年よりやや長く、能登地域では平年よりやや短く、前年より長い。
ゆめみづほは、近年比81～109%（県平均95%、加賀：96%、能登：93%）と加賀地域は近年並で前年より長く、能登地域は近年よりやや短く、前年並。
ひやくまん穀は、前年比97～133%（県平均：113%、加賀：103%、能登：127%）と加賀地域で前年並、能登地域で前年より長い。
2. 茎数は、コシヒカリは平年比72～139%（県平均：89%、加賀：86%、能登：93%）と、加賀地域は平年および前年よりやや少なく、能登地域は平年および前年並。
ゆめみづほは、近年比69～133%（県平均92%、加賀：93%、能登90%）と加賀地域で近年及び前年並、能登地域で近年よりやや少なく、前年より少ない。
ひやくまん穀の前年比69～215%（県平均：109%、加賀：82%、能登：183%）と加賀地域で前年よりやや少なく、能登地域では前年より田植えが早まったため多くなっている。
3. 葉齢は、コシヒカリは平年比88～105%（県平均98%、加賀：-0.1葉、能登：-0.2葉）、ゆめみづほは近年比89～104%（県平均：98%、加賀：-0.3葉、能登：-0.1葉）、ひやくまん穀は前年比96～131%（県平均：109%、加賀：-0.1葉、能登：+1.3葉）となっている。
葉齢展開は、コシヒカリは平年に比べ加賀地域で1日程度、能登地域では1～2日程度遅い。ゆめみづほは加賀地域で近年より2日程度遅く、能登地域で近年並～1日程度遅い。ひやくまん穀は加賀地域で前年より1日程度遅く、能登地域では田植えが前年より早まったため前年より10日程度早い。
4. 葉色の発現は、コシヒカリは平年並、ゆめみづほは近年並。ひやくまん穀は加賀地域で前年並、能登地域で前年よりやや濃くなっている。

㎡当たり茎数（平年、前年）及び株当たり茎数

| | | | | | | | |
|--------|-----|------|----------|----------|---|------|-----|
| コシヒカリ | 県平均 | 423本 | （平年比 89% | 前年比 90% | ） | 23.2 | 本/株 |
| | 加賀 | 428本 | （平年比 86% | 前年比 85% | ） | 23.7 | 本/株 |
| | 能登 | 415本 | （平年比 93% | 前年比 101% | ） | 22.5 | 本/株 |
| ゆめみづほ | 県平均 | 476本 | （平年比 92% | 前年比 90% | ） | 25.8 | 本/株 |
| | 加賀 | 511本 | （平年比 93% | 前年比 93% | ） | 28.5 | 本/株 |
| | 能登 | 405本 | （平年比 90% | 前年比 84% | ） | 20.6 | 本/株 |
| ひやくまん穀 | 県平均 | 313本 | （平年比 — | 前年比 109% | ） | 17.7 | 本/株 |
| | 加賀 | 347本 | （平年比 — | 前年比 82% | ） | 20.6 | 本/株 |
| | 能登 | 279本 | （平年比 — | 前年比 183% | ） | 15.0 | 本/株 |

【病害虫の発生状況】

いもち病の発生は報告されていないが、発生はやや多と予想されている。雑草地におけるカメムシ類の発生はやや多いと予想されており、特に飛翔性カメムシ類が多い。

[病害虫発生予察注意報第3号（平成30年6月14日付）参照]

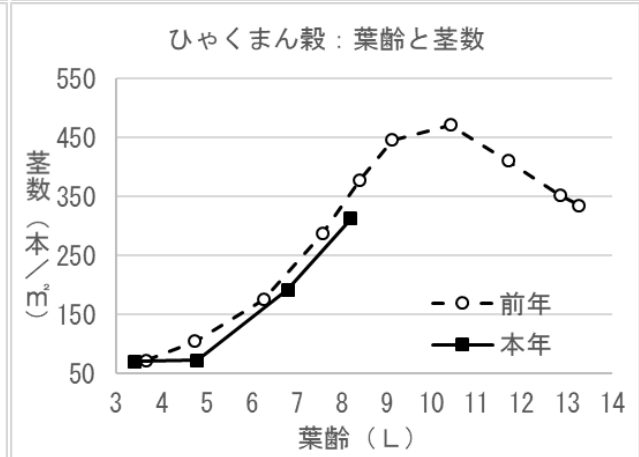
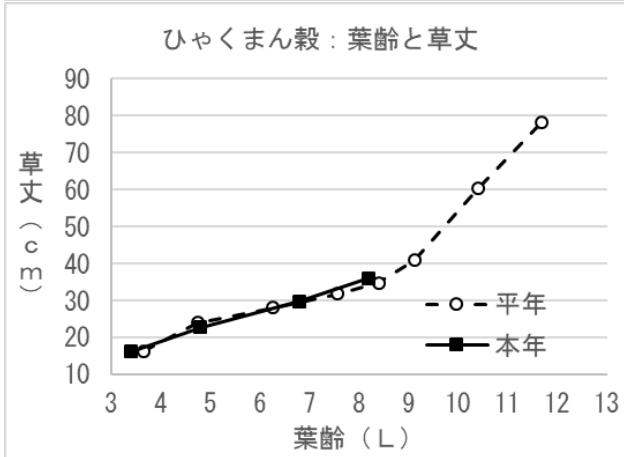
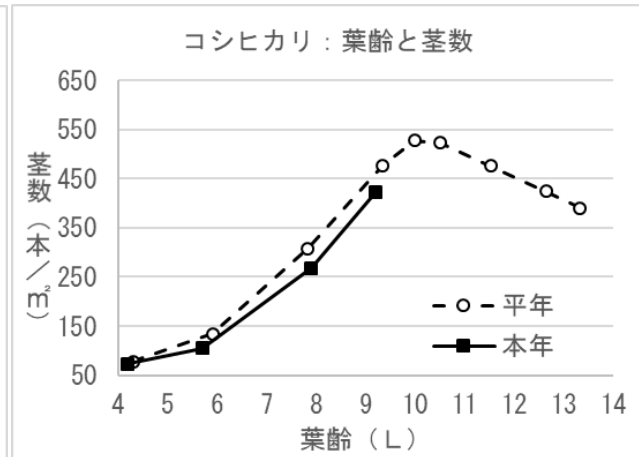
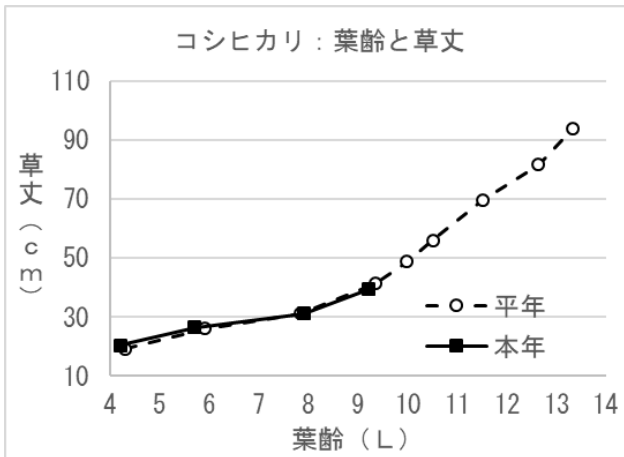
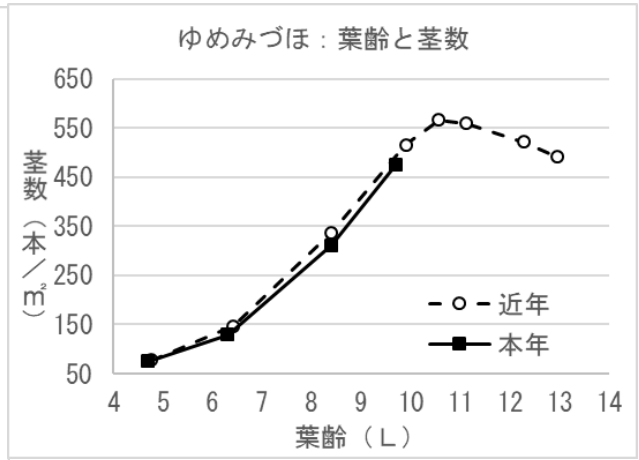
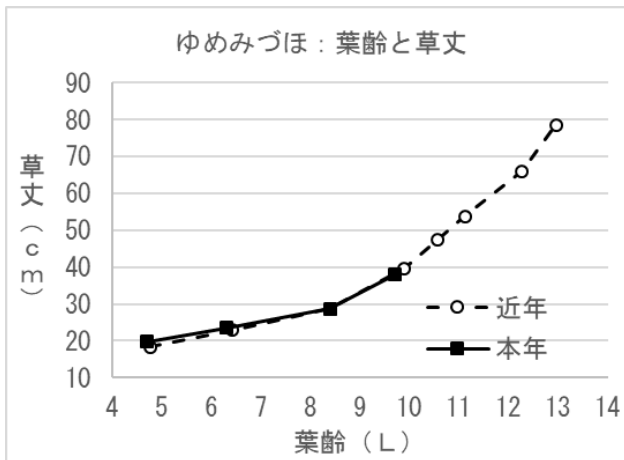
当面の対策

1. 乳白粒の発生防止のため、中干しを継続し、遅発分けつの発生抑制、籾数過剰防止に努める。なお、中干しを行っていない圃場では、直ちに中干しを実施する。
2. 用水量が十分確保できない地域においても、根の活力向上を図るため、田面の亀裂が生じない程度に中干しを実施する。
3. 5月20日以降に移植が行われたほ場においても、分けつの発生が旺盛となることを見込まれることから、中干しを早急に開始する。
4. 中干し効果を高めるため、溝切りを実施する。なお、溝切り間隔はほ場の排水条件に応じ、10～15条間隔とし、末端を排水溝に接続する。
5. 早生の中干しについては、幼穂形成期を迎える6月25日頃までとし、以後、間断通水による飽水管理を行う。なお、加賀地域の生育の早いほ場では幼穂が確認（0.1～0.5mm）されている。
6. 幼穂形成期（出穂前25～15日）に18℃未満の最低気温が予想される場合は、水深10cm以上の深水管理とし、不稔籾の発生防止に努める。
7. **いもち病の発生がやや多と予想**されているため、葉いもちの早期発見に努め、初期の防除を徹底する。**いまだに本田に放置されている補植苗**は、葉いもちの伝染源となるので**直ちに除去**する。
8. 稲体の健全化を図るため、ケイ酸質資材が未施用のほ場では直ちに施用する。
9. 早生の生育は近年並～やや遅れているので、分施肥による施肥管理を行う場合は、幼穂を確認し施用すること。なお、1回目の穂肥は幼穂1～2mmを確認したうえで施用する。
10. 斑点米カメムシ類の発生密度を下げるため、生息場所である畦畔や農道の除草を徹底する。除草を集落など地域全体で一斉に実施すると密度低下の効果が高い。なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。
11. 過去に白葉枯病が多発した地域で予防剤を箱施薬していない場合は、予防粒剤を6

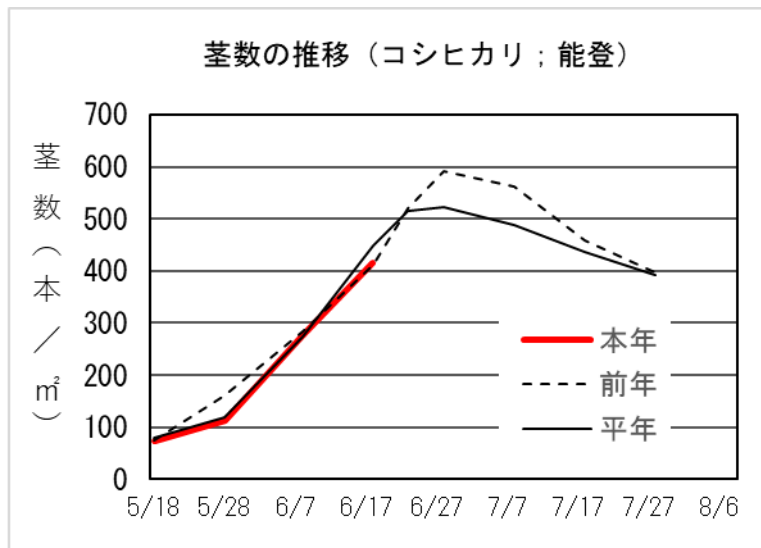
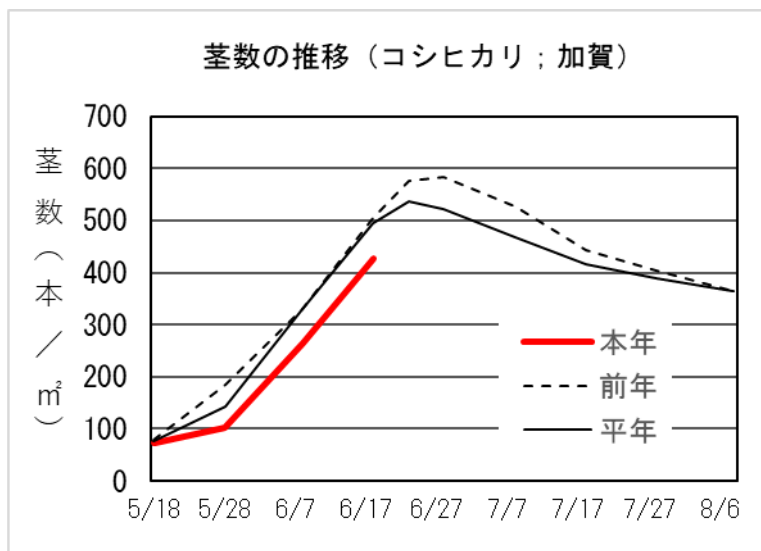
月20～30日に散布する。

<参考：草丈の伸長および茎数の増加傾向>

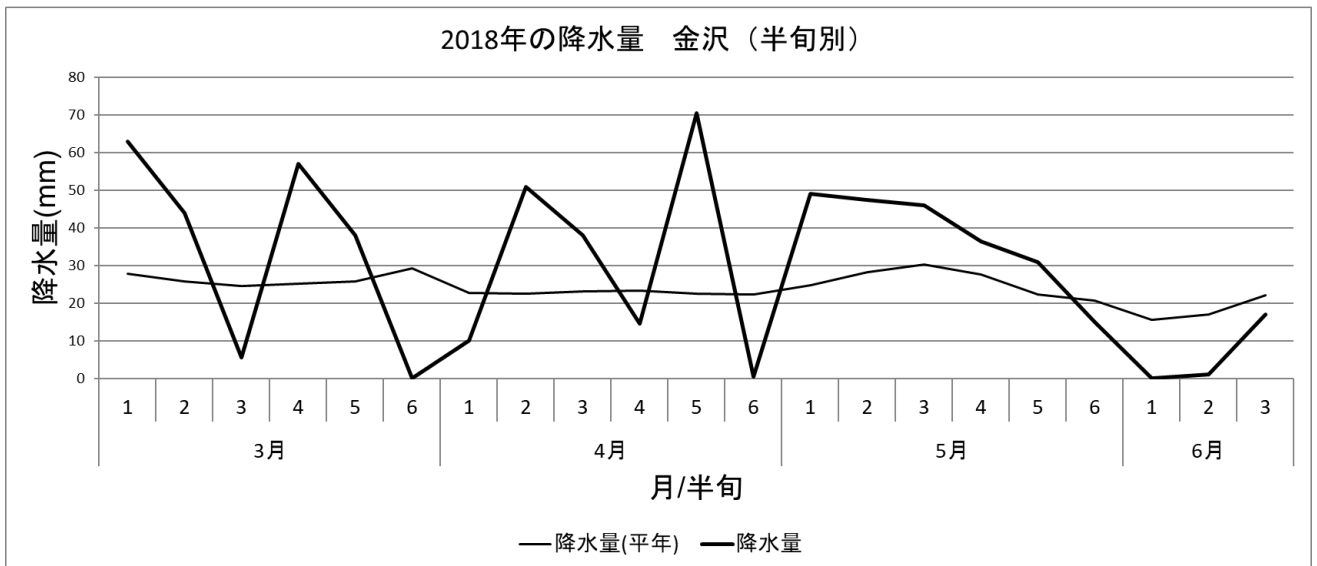
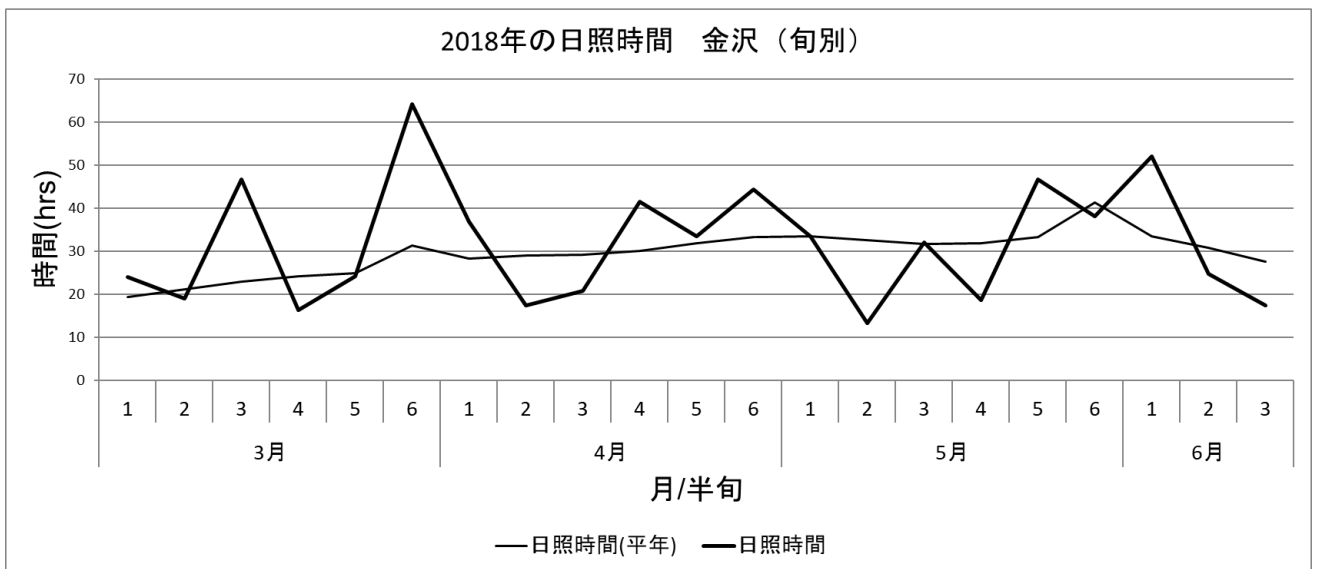
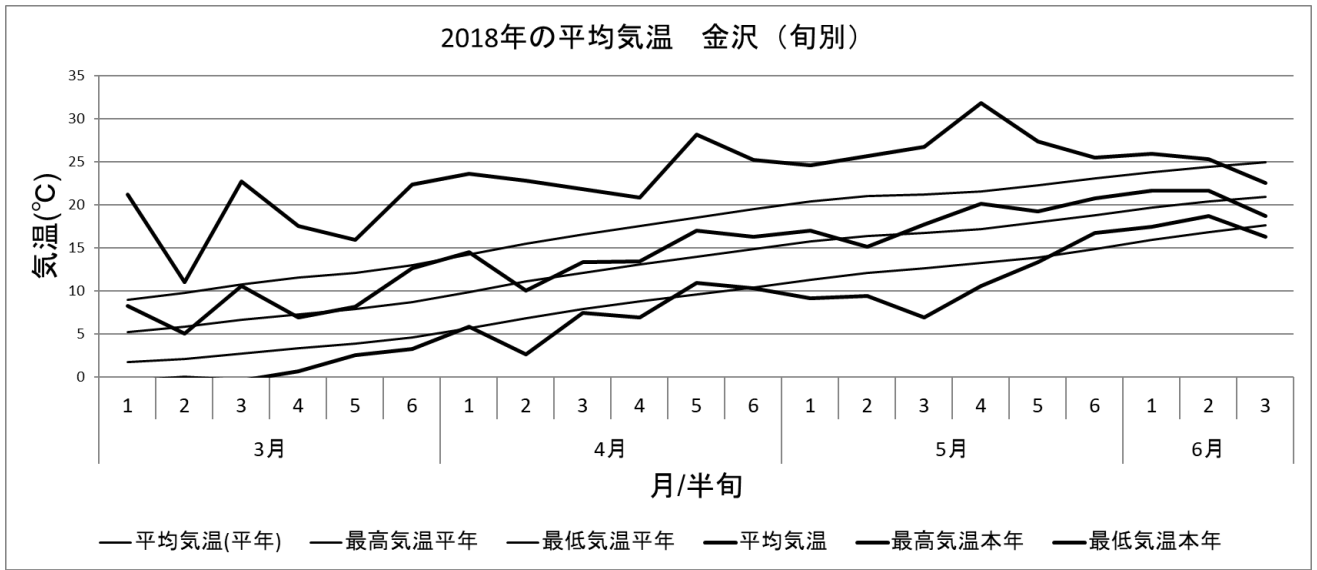
- ・ 葉齢を基に草丈の伸長および茎数の増加を平年と比較すると、コシヒカリは平年並、ゆめみづほは近年並、ひやくまん穀は概ね前年並となっており、葉齢の展開速度に見合った生育進度となっている。



・また、調査日を基にコシヒカリの茎数増加を平年及び前年と比較すると、加賀地域では平年および前年より少なく、能登地域は平年並および前年並となっている。



気象経過イメージ（金沢气象台）



気象経過イメージ（金沢気象台）

